

るなるえあ
く天羽狐の創作室く
三々梨弥生

「目的地」

※この物語はフィクションです。

「目的地」

三々梨弥生

『柳通り』の一角。
暗い夜道をボウツと照らす街灯の下で、その客はタクシーを止めた。

たった一人で、音もなく乗り込んできた客……俯いたその顔は陰になり、表情が見えない。まだ若い娘だろうと予測はつくが、そろそろ深夜と呼んでも差し支えがなさそうなこの時間帯、そんなに若い娘がたった一人でうろついているとは思えなかった。駅前の繁華街ならまだしも、この辺りには夜中に空いている店はおろか民家も無いのだから。

「蓮池病院まで」

目的地を告げたその声は、ひどくか細く、注意していないと聞

き漏らしそうだ。長い黒髪は腰まで伸びて、古風なワンピース共々、現代離れた印象を抱かせる。

(まさか……幽霊じゃないだろうな)

タクシー運転手の鳥羽修一は、心の中でそう呟いた。

この業界に入って三年——先輩運転手たちの噂でしか聞いたことのない「柳通りの幽霊」が、ついに目の前に現れたのかも知れない。もしそうなら今すぐこの客を夜道に放り出して逃げ去るところだが、「お客様」が生身の人間だった場合、会社全体の信頼性に被害が出る。

そう思うと、下手なことはできなかった。

「はい。蓮池病院ですね」

鳥羽は客に向かって頷いて、ハンドルを握りアクセルを踏み込んだ。

柳通りの幽霊の話が囁かれ始めたのは、鳥羽が入社してすぐの頃だろうか。

夜の柳通りには気をつけるよ——その謎の忠告から始まった先輩の怪談話。長い黒髪の女が一人、夜中の柳通りの街灯の下に立っている。告げる行き先は、必ず蓮池病院。目的地に着き、運転手が振り返ると……

よくある定番の怪談話だった。

実際に幽霊を乗せたと言言する運転手も少なからず存在するし、他の運転手も可能な限り夜の柳通りを避ける。鳥羽だって、そんな話を聞いた以上は現場を通りたくないというのが本音だった……が、その日はたまたま事情が重なってそこを通るしかなかったのだから仕方がない。

案の定、というか。よく出来た偶然、というか。

(……………)

鳥羽はバックミラー越しに、チラと後部座席に目をやってみた。客の女は相変わらず俯いたままで微動だにしない。目的地を告げたつきり押し黙ったままだし、気配というものをまるで感じないように思う。

(怪談話の続きはどうだったっけ)と、鳥羽は考えた。

……運転手が振り返ると、客の女は消えている。それで正しい。確か、そうだったはずだ。証拠が残らないから、運転手が幻覚を見たということも在り得る。夜の柳通りを避けていた身とはいえ、現に鳥羽はずっとそう思っていた。

……今までは。

対向車のライトも見えず、街灯がぼつりぼつりと間隔をあけている道は、薄暗いという表現を通り越して黒い色でしかない。自分の車のライトが唯一の光源のようなもので、一見変わらない景色が、確実に進んでいるはずの距離をひどく曖昧なものにしていた。

車内の空気が重く感じられる。蓮池病院までは十分くらいで着けるはずだが、もう一時間も経ったような錯覚に陥りそうだ。

もしかしたら、同じ道をぐるぐる走っているのかも知れない。いつまで経っても柳通りから抜け出せず、幽霊を乗せたまま、延々とそこを廻るのだ……

キツと音がして、タクシーが止まった。

考え事の渦から現実世界に戻ってきた鳥羽は、そこが蓮池病院の前で、どうやら自分がブレーキを踏んで車を止めたらしいということがわかった。

「着きましたよ」

ほっとしてそう言ったのもつかの間、鳥羽の体温がすっと下がる。……怪談話のクライマックスは、ここからじゃないか！

——運転手が振り返ると、客の女は消えている……その一言を思い出した瞬間、鳥羽は頭部を後ろに向けようとした体勢のまま固まってしまった。

振り向くべきか、振り向かざるべきか。

「お客さん……？ 着きましたよ？」

鳥羽の呼びかけにも、客は黙ったままだ。仕方なく、ぎこちない動作で首を後ろに振り向ける。時間が長くも短くも感じられるなか、鳥羽の目は後部座席を捉えた。誰も乗っていない。

さっきまで人が座っていたような凹みを僅かに座席に残し、客の女は消えていた。

「でっ……」

出た！——正確には「出た」のではなく「消えた」のだが——世の常でそう叫びだしそうになった口からは、それ以上の言葉が出て来ない。結果、あんぐりと口を開けるといふ非常にかっこ悪い表情になったが、気にしてはいられなかった。

幽霊……？ それとも、幻覚だったのか……？

叫びだしたい衝動に駆られるが、恐怖に凍りついた体ではそれすらままならない。そんな状態でどうにか搾り出した声は、自分が出した声にもかわからず、鳥羽は場違いだと思わずにはいられなかった。

「消える前に乗車料金を払えよな！」

ひどく現実的なそのセリフは、恐怖を追い出そうとしたためだろうか。怒ってみせることで、平常心に戻ろうとしたのかも知れない。お化け屋敷に入った子供が強がって、出てくるお化けに難癖をつけるように。

無理やり笑い話に作り変えようとした鳥羽の無意識の努力は、しかし、反対に作用してしまった。それも、最もタチの悪い方向に。

「ごめんなさい…… お金、ないの……」

耳元で突如聞こえた声に心臓が跳ね上がる。ぞわりとした寒気

を背中に感じつつ、鳥羽の頭の中は徐々に真っ白な色に侵食されていった。

真横。助手席から身を乗り出すようにして、ケタケタ笑う女の顔が鳥羽の間にあった。さっきまでのか細い声ではなく、いやにハッキリした声が耳を打つ。

「ユウレイに向かって怒鳴るなんて、運転手さん、いい度胸してるわねえ！」

ケタケタケタと、何がそんなに楽しいのか女は笑う。

すぐ隣にいなながら息づかいも体温も感じられない女を横に、鳥羽の意識は今度こそ完璧に、真っ白に塗りつぶされた……

「どうした、鳥羽？ 顔色が悪いぞ」

帰りがけ、すれ違う先輩が鳥羽の顔を覗き込む。傍から見てもんな顔色なのかは自分ではわからないが、自分の体温がいやに低いことだけはよくわかった。

「幽霊にでも遭ったか？」

ハハハッと笑いながらの先輩の言葉は、普段ならば普通に受け流すところだが、アレを実際に見た鳥羽には最悪に悪質な冗談にしか聞こえない。かといって半信半疑でもある今、素直にはいそうですと頷けるものでもなかった。……できれば信じたくないということもあるが。

「何でもないです。お疲れ様でした」

力の入らない声で頑なにそう告げてから、鳥羽はふらふらとした足取りで会社を後にした。

アレを見てから、いったん真つ白になった意識。

考えることを一時的に放棄した頭が再び動き出した時には、鳥羽はハンドルを握り、客を運び、降ろした先でまた別の客を乗せ——という通常通りの仕事を、機械的な動作で繰り返していた。

あの後のことは、まったく記憶にない。アレを見たという自分の記憶も怪しいもので、よもや仕事中に居眠り運転をしていたわけではあるまいが、全て夢の中の出来事だった気もしてくる。

夢なのか幻なのか定かではない。アレが夢だとしたら、まさに悪夢としか言いようがなかった。目覚めた今でも、正直言って寒気が抜け切らない程である。

(先輩があんな話をするから、あんな夢を見るんだ)

自分に怪談話を聞かせた張本人を恨みつつ、鳥羽は徒歩で帰路を急いだ。こんな日は、早く家に帰って寝てしまおうに限る。

鳥羽の家は、会社のすぐ近く、徒歩で十五分ほどの所にあった。家と呼ぶにはいささかお粗末な古いアパートだが、一人暮らしをする鳥羽にとって丁度良い狭さである。

一步進むごとにカタンカタンと派手な音の鳴る鉄製の外階段を上がり、二階へ。他の住人はすでに寝静まっているのか、静かな夜に自分の足音だけが大きく響いた。

靴から鍵を取り出し、ドアノブの下の鍵穴に差し込む。カチャっと鍵が回り、留守を堅固に守った扉が、部屋の主を前にその守りを崩した。

中に入り扉を閉めるとそこは真つ暗で、鳥羽は手探りで電灯のスイッチに手を伸ばした。パツと部屋が明るくなり、掃除の行き届いていない室内があらわになる。

「汚い部屋ねえ」

ちゃぶ台の上に腰掛け、呆れたように部屋の中を見回す女——妙に背景が透けて見えるその姿を視認するなり、なんてこつたと鳥羽は低く呻いた。

* * *

……なんだか、とてつもなく嫌な夢を見た気がする。

頭から布団を被った状態で目を覚まし、得体の知れない後味の悪さに、鳥羽は目を閉じたまま顔をしかめた。

寝返りを打とうとして、気付く。

身体が重い。運動神経が言うことをきかず、指一本自由にならない。

(金縛り……?)

意識に関係なく全身を支配する恐怖。早く目覚めなければ。目

覚めれば、この恐怖は過ぎ去る。早く目を開ける。自分はまだ夢を見ているのだ。早く起きろ。

「……っ……」

ただ息が漏れるだけの声を発し、鳥羽は必死で、重い瞼を押し開けた。

——アハハハハハハ キヤハハハハハハ

顔にかかる冷たい髪の毛。鳥羽に覆いかぶさる青白い女の顔が、鳥羽の顔を見下ろして笑っていた。

俺は仕事だらけの毎日で疲れているんだ。僅かな安息時間の睡眠まで邪魔されてたまるか！

もはや恐怖に麻痺してしまった脳内には怒りの感情しか浮かんでこず、文句を言うためだけに気力をかき集める。ようやく自由を取り戻した口は、開口一番、寝起きのしわがれ声で「どける！」と言った。

その一言で呪縛が解け、一瞬で全ての運動機能が回復する。無理に声を出して咳き込みながら、鳥羽はよろよろと身を起こした。室内は薄暗いが、カーテンの隙間から強烈な光が差し込んでいる。今は何時だろうと時計を手に取ると、針はすでに十時を告げている。

帰宅したのが午前二時。そこから明け方までずっと幽霊に語りかけられて眠れず、ようやく寝たと思ったら今度は金縛り——今日は昼からの出社だから良いものの、通常勤務の日なら確実に遅刻だ。

ため息をついて立ち上がり、カーテンを開ける。どっと光の洪水を浴びたところで、背中に冷たい気配が寄り添った。

「おはよう、運転手さん」

腰までの長い髪にワンピース……朝になったら消えるかと期待していたのだが、見事に裏切られたらしい。

(……いい加減にしてくれ！)

胸中でそう叫び、ひやっとした空気から遠ざかるべく、部屋と一緒に流れてくれないかと願ったが、いくら洗っても背中にまとわりつく冷気（あるいは霊気）は消えてはくれなかった。

幽霊が音もなく近寄ってきて、勝手に台所を覗き込む。

「そんなところで洗わないで、ちゃんと洗面所に行きなさいよ」

「………」

無視して水を止め、顔をタオルで拭きながら冷蔵庫を開ける。

「ロクな物入ってないじゃないの」

「………」

牛乳と食パンを取り出し、冷蔵庫の扉を閉めた。間に挟まれそうになった幽霊が慌てて飛びのいた。

食パンはオーブントースターに放り込み、グラスに牛乳を注いで一気に飲み干す。二杯目の牛乳とトーストになったパンをちやぶ台に運び、万年床を座布団代わりに座ると、それが鳥羽の朝食の準備の完成だった。

「朝ごはんそれだけ？ 体悪くするわよー」

幽霊が勝手に向かいに座る。無視して、鳥羽はトーストを齧った。

幽霊はしゃべり続ける。

「一人暮らし？ 奥さんとかいないの？」

「……………」

「ちゃんと掃除してるの？ 布団干したら？」

「……………」

「今日もいい天気イ。ねえ、そう思わない？」

「……………」

幽霊が冷気を振りまきながらあれこれと話しかけてきて、鳥羽はその全てに無言を通した。

存在しないモノに、返事を返す必要はない。無意識を続けければそのうち諦めて消えてくれるだろうと、鳥羽はそう思っていた。それまでは持久戦だ。

「ここまででいいです！ 降ろしてください！」

落ち着きなく車内を見回しながら、客がそう言った。料金メーターの示す金額を払い、客は飛び出すようにして鳥羽のタクシーを後にする。

「……………どうもありがとうございました」

鳥羽は足早に遠ざかる客の背中に、届かないだろうが一応マニュアルどおりの言葉を掛けた。……………これで何人目だろうか。

鳥羽のタクシーに乗り込んだ客はことごとく、何か異常なもの気配を察知して逃げるように去っていく。目的地に着く前にタクシーを止めて出て行く客も大勢……………そして、彼らの大半は降り際、青い顔をして車内をきよろきよろと見回すのであった。

数日が経過した。

一向に好転しない状況に鳥羽が重いため息をついていると、二人の若い女性がタクシーに乗り込んできた。

客のうちの一人が鳥羽に訊ねる。

「蓮池病院まで、いいですか」

「えっ？」

その目的地に、どきんと心臓が跳ねた。……………普通に聞いたのならなんでもない目的地じゃないかと思いつき、鳥羽は驚き顔を隠して職業スマイルを浮かべる。

「はい。蓮池病院ですね」

今は仕事に専念しようと、鳥羽は思った。バックミラー越しに客たちを見る——空調を入れているわけでもないのにひんやりする車内で、三人の娘たちが仲良く後部座席に座っていた。

目的地までの道すがら、何とはなしに客たちの会話に耳を傾けてみる。……………どうやら、彼女たちは蓮池病院に入院している友達を見舞いに行くらしい。

夜の蓮池病院行きとは違って、実に早く、簡単に目的地に着い

た。

鳥羽の「着きましたよ」の声におしゃべりを止め、娘たちが金を払ってタクシーを降りる。病院に入っていく二人の後姿を見ながら、鳥羽はふと、同年代かな、と感想を抱いた。

車内に残った娘に視線を移す。後部座席の片隅で、一人ちよこんと座る娘。さつき客に紛れていた時は、仲良し三人組が座っているように見えた。……まるで座敷わらしだな。

「一緒に降りれば良かったのに」

無言を通すと決めていたにもかかわらず、思わず口をついて言葉が出てきた。しまったと思ったが、出た言葉を引っ込めるわけにもいかない。どうせ、無言を通したところで消えるという保障はないのだ。

こうなったら腹をくぐる覚悟で、鳥羽は幽霊に面と向き合った。「ここに来たかったから、タクシー止めたんだろ。目的地に着いたんだから降りてもらえませんか？ お客さん」

「だーめ」と、幽霊は即答する。そして、にっこりと冷気を漂わせながら笑った。「おしゃべりしてくれる気になったのね。嬉しいわ」

* * *

夕方までの勤務の日は、家で夕飯を食べることになる。

外食をしてもいいのだが、幽霊がびったりくっ憑いている状態で行くのは気が引けた。見えるのはどうやら憑かれている自分だけのようだが、振りまく冷気を感じる人は多いのだ。

そういうこともあり、鳥羽は帰りがけにスーパーに寄ったのだが……

「まあたお弁当？ 飽きないの？ 栄養偏つても shouldn't わよお」
「……うるさいな」

お惣菜を手を取れば「手抜き」、インスタントラーメンの前に立てば「わびしい」、パンコーナーに向かえば「夜はやっぱりお米でしょ」——好き勝手言うことこの上ない。

冷凍食品まで拒否されて、鳥羽はうんざりとため息を吐いた。周りの買い物客には聞こえないように、小声で抗議する。

「じゃあ、どうしろって言うんだよ」

幽霊はしれっと答えた。

「自分で作ればいいのよ」

「そんな面倒なこと……」

「いいからいいから。はい、こっち」

冷たい手で鳥羽の背中を押し——と言っても力は無く冷たさだけを感ずるだけなのだが——幽霊は食材コーナーへ鳥羽を誘導する。

言われるままに肉やら野菜やらをかごに入れ、レジを通って袋に詰める。久しぶりにまともな買い物だった。

「お塩を一さじ入れて。……違う違う！ それはお砂糖よ！」

「わっ……とと。セーフ……」

幽霊の指示で調理を開始……したのは良いが、始終怒られっぱなしである。しかし、怒っているわりには幽霊は楽しそうに笑っていた。

「いまどきお塩とお砂糖を間違えるなんてベタねー」

「うるさいな！ 普段料理しないんだよ！」

なんだかんだでカレーライス（サラダ付）完成。ちゃぶ台が豪華に見えた。……豪華に見えるのはちゃぶ台だけで、周りはいつも通りの万年床なのだ。

「明日お仕事お休みなんですよ。部屋片付けなさいね」

「はいはい」

ぞんざいに応対しながら、幽霊のレシピのカレーを口に運んでみる。

「……うまい」

素直に感想を漏らした鳥羽の言葉に、幽霊がちゃぶ台の向こうから身を乗り出した。すうっとした冷気が、鳥羽の顔を冷やす。

「ホント？ おいしい？」

にこにこ聞いてくる幽霊の前に、この冷気にも慣れたな、と鳥羽は思った。最初は不気味でしかたなかったが、慣れてしまえば案外気にならないものだ。

……幽霊に慣れるというのもどうかとも思ったが。

身体が重い……

鳥羽は目を閉じた状態で、すぐに理解した。

（……またか）

動かない身体を叱咤し、自分を押さえつける力に対抗する。鳥羽が目を開けると、そこには、椅子か何かに腰掛けるように鳥羽の上に座っている幽霊がいた。

「おはよ、運転手さん」

実に楽しそうに、金縛りの元凶が笑う。これはまだ良いほうで、酷い時には悪霊のごとく笑っている顔があったりするのだ。その時は、見ているだけで精気が奪われそうな気になるから恐ろしい。寝起きの悪さにうんざりし、鳥羽はため息と共に言った。

「……いい加減、成仏しろよ」

「やーよ」と、幽霊。「あたし、運転手さんのこと気に入ったんだもの」

それはまた困ったものに好かれたもんだ……自分のことに対し、鳥羽はどことなく客観的に考えた。幽霊に一生憑きまどわれるとなると、やっぱり寿命が縮んだりするのだろうか。一分一秒を惜しむほど生に執着があるわけではないが、やっぱり明日を拝めぬ身体になるのは嫌だと思ふ。心残りになるものもないんじや、死ぬにも死に切れない……そこまで考えて、鳥羽は何かが間違っていると感じた。心残りが無いから幽霊になるっていうのはあま

りにも哀れすぎるし、そもそも、心残りがあるから現世に留まるというのが幽霊なのだ。

つまり、心残りがなくなれば幽霊は成仏するということ。

鳥羽は何故今まで気付かなかったのだろうと自分の馬鹿さ加減に呆れ、同時に、憑きまとう幽霊を成仏させる方法に思い至った自分自身に感謝した。善は急げとばかりに、幽霊に問いかける。

「お前の心残りって何なんだ？」

「えっ？」幽霊がきよとした表情を見せた。

「心残りが無くなれば、成仏するんじゃないのか？」

鳥羽の意見に、幽霊が「ああ」と手を打つ。……が、次の瞬間、その顔を曇らせた。

「……あたし、自分の心残りがわからないの」

鳥羽に憑いてから初めて、いつも笑っていた幽霊は沈痛な面持ちをした。単に忘れていたのか触れないようにしていたのかはわからないが、幽霊には幽霊なりの苦労があるらしい。

「あたしね、幽霊になる前の記憶が全くないのよ。どんな人間だったのかとか、どうして死んだのかとか。覚えてるのは、自分がこの服を着てたっただけ」

幽霊はそう言って、着ているワンピースを指差した。ワンピース越しに、後ろの風景が透けて見える。鳥羽は、幽霊の冷たさが増したような気がした。

語りかけようとして……名前すら知らなかったことに気がつく。「名前も覚えてないのか？」

「そう」

「じゃあ……『幽子』でどうだ？ 幽霊の『幽』に、子供の『子』。名前が無いと不便だろ」

唐突な鳥羽の提案に、幽霊——幽子は呆気にとられ……「どうせなら、優しいの『優』にしてよね」と憤慨してみせた。それから、くすつと笑う。

「ま、いいわ、幽子で。ありがとう、運転手さん」

「鳥羽修一、だよ」

* * *

幽子の心残りを見つける——それが、鳥羽に出来た新たな目標だった。さっそく、ぼんやりしたらだと過ごす予定だった休日を利用して、街へ出る。何のアテも無かったわけではなく、鳥羽が向かった先は柳通りだった。

「柳通りからタクシーに乗るってことは、柳通りで何かあったってことだろ。……でも、どうしてタクシーなんだろうな？」

「タクシーはお客を乗せるのが仕事だからよ、きつと。外の人間を招き入れるのが前提でしょ？ 普通の乗用車には、道端に立ってるあたしの姿は見えないみたいだったし……タクシーに乗っちゃうのは、あたしの習性みたいなものよ。気付いたら乗っちゃ

うの。それで、病院に着いた途端に消えちゃって……その繰り返し」

思い出すように、幽子は言った。そして、鳥羽の正面に回りこんで笑う。

「鳥羽さんは、初めてそのサイクルを壊してくれた人なの。それまでの運転手さんは皆怖がってすぐに逃げちゃって、あたしが幽霊だっけわかった後に声掛けてくれる人なんて一人もいなかった」

「そうか」

「そうよ」

そんな会話をするうちに、幽子が立っていたポイントに到着する。確かこの辺だったよなあと記憶を掘り起こしながら、鳥羽は違和感を感じていた。

何に對しての違和感なんだろうかと、しばし考え込む。歩道と車道。電信柱と街灯、ぼつぼつと立つ街路樹。街路樹の根元に生える雑草——何かが足りないような気がするのだった。もっとこう、思い描いていた何か……あえて言うなら、何も無いのだった。幽霊が出そうな目印が無いのだ。

道路に出るくらいだから事故死か何かだと思っていたのだが、それにしても道路に何も無さ過ぎる。例えば、『事故多発!』の看板や、道端にひっそりと置かれた花束——鳥羽は無意識に、そういうものがある現場を想像していたのであった。

「何にも無いなあ」

いささか拍子抜けといった体で辺りを見回した鳥羽を、幽子が

不思議そうな目で眺めている。もしかしたら、ここで死んだという推測自体が間違っていたのかも知れなかった。

……となれば、次に考えられるのは病院か。

ここから蓮池病院までというのが幽子の癖だったというのなら、やはりその行動には何か意味があるはずだ。ここで死んで病院に運ばれたのか、はたまた、この辺りに家があって、病院までの通院が日課だったのか。どちらにしろ、柳通りと蓮池病院をつなぐ何かがあるのは間違いなかった。

「病院の方、行ってみるか」

びったり寄り添う冷気を背中に感じながら、鳥羽は病院のある方へ向かって歩き出した。途中、幽子が背中に覆いかぶさってくる。

「えへへへ」

自分で歩くと怒ろうとした鳥羽は、笑う幽子を背中に乗つけたまま、まあいいかと考え直した。ちょっと疲れるが、そう遠い道でもないのだ。しばらく好きにさせておこうと思ったのである。

歩きながら、鳥羽は幽子に問いかけた。

「なあ、お前、この辺に住んでたかも知れないんだろ。見覚えあるものとか、ないのか？」

「うーん…… こんな何にも無いところじゃ、判別つかないわねえ」
真面目にやっているのかそうでないのか、幽子のはのんびりとそう言った。負ぶさったまま鳥羽の肩を叩き、幽子は病院ではなく繁華街の方を指差した。

「賑やかなところに行きたいな。連れてってよ」

「……しかたないなあ」

幽子が行きたい方向に行けば、何かあるかもしれない。そう思った鳥羽は、幽子が言うままの方角に転進した。

繁華街が見えてくると、幽子が背中に負ぶさるのをやめ、今度は鳥羽の腕を取ってびったり左側をキープする。

「へっ、デートデート！」

冷気をびよんびよん飛ばしながら、幽子がスキップした。生まれてこのかた「デート」なんて言葉に無縁だった鳥羽は面食らったが、楽しそうな幽子の邪魔をするのも無情な気がして、されることがままになった。

繁華街を歩くのは若い男女の二人連れが多く、独りで歩くのは鳥羽一人くらいのものだ。隣には勿論幽子がいたが、道行く人にはその姿が見えない。たまに冷気を感じ取り、奇妙なものを見る目を鳥羽の隣の空間に向ける人がいるくらいだった。

もし見える者がいるなら、周りの男女と同じようにウィンドウショッピングをする鳥羽と幽子のカップルが見えただろう。幽子は興味を引くものがあれば指を差し、鳥羽にあれこれ話しかけ、鳥羽がようやくそちらを向いた時にはすでに別の物を指差していた。そんな幽子の様子に鳥羽は呆れ、どうして女ってすぐに目移りするんだろうと考えた。

ふと目を引くものがあり、幽子が指差す物をそっちのけで目を移す——小さなブティックのショーウィンドウで、服を来たマネキンがこちらを見ていた。美女の顔をかたどったマネキンが着ているのは、花模様が可愛らしいアンサンブル。

(あんなマネキンより、幽子の方が似合いそうだな)

頭の中で、幽子にアンサンブルを着せてみる。続いて長い髪より短い髪の方が幽子に合うかと想像していた鳥羽の前に、当の幽子が顔を出した。——逆さまに。

「な、なんだよ！」

跳ねる心臓を押さえ、周りを気にしながら小声で怒鳴る。幽子はずるりと鳥羽の肩から滑り降りると、口を失せさせた。

「だって、呼んでも気付かないんだもん。乗っても気付かないから、顔出してみただけ。ね、驚いた？」

「別に！」不意打ちの動揺を隠そうと、強がって見せる。何か言わねばと焦った鳥羽の頭は、あろうことか、さっきまで考えていたことを思わず口に出した。

「幽霊って、服脱いだり髪切ったりできないのか？」

「んん？」幽子は質問の意味を考えるように首を傾げ、次の瞬間には、ニタアつと意地の悪い笑みを浮かべた。

「なあに？ 鳥羽さん、あたしのヌード見たいわけ？」

「誰が！」

真っ赤になって怒鳴った鳥羽の大声は、周りの注目を集めつつ、繁華街中に響き渡った。

結局、繁華街には何も無く、駅前まで足を延ばしてみたが全て徒労に終わった。……楽しそうな幽子を見ていると全てが無駄だったという意識は薄れるが、幽子の心残りを見つけるという当初の目的は果たせぬままだ。

ただ一つわかったのは、幽子は病院に入れないらしいということだった。

「バリアーってどういうの？ 見えない壁みたいなのがあって、中に入れないの」

病院の自動ドアを前に、幽子が立ち止まってそう言った。仕方ないので鳥羽は一人で病院に入ったのだが、中をぐるっと一周してきても、肝心の幽子がいないので、鳥羽にはただの病院にしか見えなかった。

出てきた鳥羽に「どうだった？」と問う幽子に、首を横に振ってみせる。そうしてから、鳥羽は病院を歩く間に考えたことを述べた。

「病院に来るってことは、何か中に用があるってことだろ？」

脳裏に浮かぶのは、お見舞いに行くと言っていたいくつかの客たちだ。幽子と同じ年くらいの彼女たちは、見舞いのために病院へ入っていった。病院へ向かう理由はいくらでもある。見舞いにしろ、通院にしろ、勤務にしろ、用があるからやって来るのだ。中に入れないということは、用がないからか、用を思い出せないか

らか。どうやら「念」というものが原動力になっていているらしい幽霊にしてみれば、「どうしても入りたい」という強い意思がなければ超えられない壁なのだろう。

わざわざタクシーに乗ってまでやって来る幽子のことを考えれば、用が無いとは思えない。この中に幽子の心残りがあると見て間違いはなさそうで、今のところの問題は、何故この病院なのかという「過去」が必要なのだった。幽子が何処の誰なのかわからない以上、進展は望めない。

気落ちする鳥羽に、幽子が言った。

「いいのよ、あたし、何処の誰だかわからなくても」

そう言いつつも、彼女の目は病院に向けられている。

「成仏できなくなっちゃって、あたしには鳥羽さんがいるもの」

冷たい幽子の存在が、更に凍りつくような冷気を増したように、鳥羽は思った。

* * *

また数日経った、ある日のこと。

「おおい、鳥羽」

一日の仕事を終えた鳥羽が帰ろうとした時、その声を掛ける者が居た。振り返った鳥羽の目に映ったのは、鳥羽に例の怪談話を

した先輩だ。

「何ですか？」

「お前、三年前の柳通りについて調べてるんだって？」

先輩の言葉に、鳥羽は頷いた。「柳通りの幽霊」の話が噂になったのは、三年前。その辺りで何か事件が無かったのかを、鳥羽は調べているのだった。勿論、幽子の過去を捜す手がかりとして、だ。

鳥羽の答えに、先輩は意を決したように切り出した。

「お前さ、『柳通りの幽霊』のこと調べてるんだろ」

別に隠すつもりは無かったが、いきなり核心に触れた鳥羽は驚いた。一拍遅れて、当然か、とも思う。三年前、柳通りとくれば、タクシーの運転手たちが思い浮かべるのは『柳通りの幽霊』だ。

凶星か、と先輩が言う。

「最近、出なくなったからな。成仏したんだろうって言って、皆は喜んでるけど……」

先輩は、鳥羽を——正確には、鳥羽の背後を——睨んだ。

「……おれはどうしても、ヤツが成仏したとは思えない。お前に憑いてるんじゃないのか？」

「何を」

「お前、ここんとこずっと顔色悪いし、ふらふらしてるじゃないか。前の夜中の勤務から、様子が変だ」

そこでいったん言葉を切り、迷うそぶりをみせてから、先輩は

続けた。「……憑いてるんだろ？」

「幽霊なんて本気で信じてるんですか、先輩」

背中に覆いかぶさる冷気を確かに感じながら、鳥羽は笑ってみせた。

「まさか、俺の背中に女の幽霊が負ぶさってるのが見えるとか、そう言うんじゃないでしょうね？」

「ああ。おれには、何も見えないけどな——」

低い先輩の声は、少々ピントがずれているものの、真っ直ぐ、幽子へと向けられていた。

「——嫌な気配がそこにくっ憑いてる気がする」

幽子のことを悪霊か何かのように言う先輩に、鳥羽はムツときた。

「冗談はよしてください」

「冗談じゃねえよ」

どうやら本気で心配しているらしい先輩は、馬鹿らしいという態度で踵を返そうとした鳥羽の腕をつかむ。

「寺とか神社とかに行つて、お祓いしてもらえ。いいな」

「嫌ですよ、そんな迷信深い真似するの」

「いいから、行け！ 牡丹灯籠になっちまうぞ！」

「……わかりました！」

鳥羽は、先輩の手を払いのけた。先輩はそれ以上追って来ようとはせず、そんな鳥羽をじっと見ている。

歩きながら、鳥羽は冗談じゃないと思った。確かに先輩の言う

とおり最近ふらふらしているが、それは暇があれば柳通りへと足を運んでいるからで、幽子に憑かれていたわけではない。

「いいの？」

鳥羽にびったりと寄り添いながら、幽子が訊いた。

「俺が幽子の心残りを見つけてやるって、自分で決めたんだ」

鳥羽のその答えに、幽子は「ありがとう」と言って微笑んだ。

くすくすという笑いは幽子の体を更に冷たく凍らせて、鳥羽の体温を少し削った。

* * *

身体が重い。

のしかかるといふより押しさえつけられているような圧力が、鳥羽の神経を鈍らせていた。何とか臉を押し上げる――幽子が笑っていた。愉しそうに、赤い口を歪めて嗤っていた。その手が、鳥羽の首へとかかる。

(幽子……！)

腕が持ち上がらない。身体中の気力を失った鳥羽には、思考以外、自由になるものが何一つなかった。その思考さえも、今はひどく曖昧だ。

幽子が悪霊になってしまう。目的を持たず、長く現世に居続け

た幽子は、歪んだ願いを持つ霊へと変貌してしまう。

(駄目だ、幽子！)

鳥羽の制止は声にはならなかったが、僅かに回復した気力が幽子の冷たい手を跳ね除けた。上体を起こした鳥羽を見て、幽子がつこりと嗤う。

――鳥羽さんと、ずうっと一緒。一緒にいるのよ。

アハハハハ キヤハハハハ――

ケタケタと嗤う幽子の冷たい体が、鳥羽に絡みつく。それをずるずると引きずったまま、鳥羽は戸口まで這い進んだ。……見つけなければ。幽子が完全に悪霊になってしまう前に、幽子の過去を見つけて成仏させてあげなければ。

――過去なんていらぬわ。鳥羽さんとずうっと一緒。それでいいじゃない。ね。

(駄目だ、幽子。それじゃ幽子の存在が消えちまう。ただの悪霊になっちまうんだぞ)

――かまわぬわ。ずうっとずうっと、彷徨うの。鳥羽さんと一緒に。ね。アハハハハハ

冷気が鳥羽を締め付ける。戸口の鍵を開けるのが精一杯で、鳥羽の手はドアノブを掴むことなくずりりと滑った。耳元で幽子が囁きかける。

――一緒。ずうっと一緒よ。あたしの心残りなんて、もういいじゃないの。アハハハハハハ

冷えて凍っていく意識の中で、鳥羽は考えていた。心残りは叶

えるものであって、捨てるものではない。捨ててしまえば、未練によつてこの世にあり続ける幽霊はその存在が歪んでしまう……心残りを捨てちゃ駄目だ、幽子。幽子の心残りを探さなければ……

「おい、鳥羽！ いるのか!？」

ドンドントと扉を叩く音で、目が覚めた。鍵が開いていることに気付いたらしく、思い切り扉が開かれる。

「鳥羽!」

鳥羽を引っ張り起こしたのは、先輩だった。

——邪魔しないでよ。鳥羽さんはあたしのものなんだから!

見えたわけではないのだろうが、自分を追い出そうとする冷気を感じた先輩は、キッと幽子を睨み付けた。

「大事な後輩を連れてかせやしねえからな、生霊!」

「いき……りよう……?」

青い顔で問い返す鳥羽に、先輩が頷いた。

「わかったんだよ、この幽霊が誰なのか! 三年前、あそこで倒れて病院に担ぎ込まれて、それ以来意識が戻らない女がいるそう。間違いないよ! お前を道連れに、あの世に逝こうとしてんだよ!」

幽子が……生霊? 幽子はまだ生きている?

ぐるぐると回る意識で、鳥羽は考えた。それなら尚更、幽子を

悪霊にするわけにはいかない。

「おい! 鳥羽!」

先輩の制止を振り切って、鳥羽は立ち上がり、壁伝いに歩き出した。

——逃がさないわよお。アハハハハハハ

鳥羽の背中に、幽子が覆いかぶさった。重さと冷たさでよろめく鳥羽を、先輩が支える。

「そんな身体でどこに行くんだよ、鳥羽!？」

「蓮池病院です。幽子の魂を……身体があるところまで連れていかないと」

身体があるから、幽子は蓮池病院を目指していたのだ。その大事な用が判明した以上、蓮池病院には幽子を阻む壁はないはずだった。

幽子の心残り……それは、まだ生きている自分に戻ること。身体への未練が、魂をこの世に繋ぎとめているのだ。

鳥羽は背中の中の幽霊に向かって、叫んだ。

「幽子、考えろ。退院したらやりたいこと、考えろ!」

——やりたい……こと?

狂ったように続いていた囁きが止んだ。

先輩に助けられ、鳥羽は何とか、蓮池病院まで辿り着いた。意を決して自動ドアをくぐる——幽子は跳ね返されることなく、病

院の中に入ることができた。

——みつけたよ、やりたいこと。

幽子が微笑んで、鳥羽の背中から冷気が消えた。

ふっと掻き消えた、幽子の存在。ほどなくして、看護師たちが慌しく移動する音が耳に届いた。

「先生、早く！ 高田さんの意識が戻りました！」

* * *

「ありがとうございます」

目的地まで送り届けた客を見送って、ふうっと息をつく。目的を持った客を乗せ、目的地まで送り届けるのがタクシー運転手の仕事。目的地についてしまえば、あとは客しただい。

バックミラー越しに後部座席を見る。誰も乗っていないそこは、かつて目的を失っていた客が座っていた場所だった。目的を見つけた彼女を送り届けたのは自分自身だが、その席が空っぽであることに、鳥羽は少し寂しさを覚えた。

あそこに座って、彼女はよく笑ってたなあ……少し前の記憶を懐かしく想いながら、気持ちを入れ替えてハンドルを握る。前を向いてアクセルを踏んだところで——

「おはよう、運転手さん！」

突然背後から抱きつかれて、鳥羽は慌ててブレーキを踏んだ。

誰かが乗り込んだ気配は無かった。少し透けて見える腕を見下ろし、声の主に思い至る。ただ、以前のような冷たさは感じなかった。

「ゆ、幽子!? お前、人間に戻ったんじゃないか……!!」

「もう幽霊じゃないわよ。これは幽体離脱——」

「ゆうたいいりだつ……?」

聞き返す鳥羽に、幽子はからっと笑ってみせた。

「そ。入院してるのって退屈なんかもん。鳥羽さんに逢いたいから、精神だけで抜け出してきちゃった」

「お前なあ……」

呆れる鳥羽に、幽子が「だって退院まで長いんだもん」と言い訳する。それよりねえ、と続けた幽子は、とても楽しそうな笑い声だった。

「鳥羽さん、こっち向いて！」

話をはぐらかせるんじゃないよ、とため息をつきつつ、鳥羽が後部座席を振り返ると——

「どう? 似合う?」

——そこには、花模様のアンサンブルにショートカットの幽子の姿があった。幽体であるため後ろの座席が透けて見える。おそらくは、実体の幽子が着ているのであろう服——

「蓮池病院の病室までお願いします、運転手さん」

幽子の笑顔につられて、鳥羽はにっこりと笑って頷いた。

目的地

「はい。蓮池病院の病室までですね」
鳥羽は今度こそ、アクセルを踏んだ。

【おわり】

《奥付》

作品名 ・ 「目的地」
作者名 ・ 三々梨弥生
初回公開年月日 ・ 二〇一二年三月一二日
公開ホームページ ・ 「るなるえあ〜天羽狐の創作室〜」
URL <http://luna-le-air.vivian.jp/index.html>